

星空の本を読む

水道費さえ払えぬ夜に

桜望子 山形県

夢を見るときに、私たちは無意識のうちに生活基盤が安定した状態を基準として考えている。安定して守られたあたたかな中で夢をみたい。けれど、夢と現実の間にある大きな亀裂に私たちは逆らえない。水道費の払えない夜の心もとなさに目をそらし、あたたかな夢で暖をとる。

ヘアクリップいっぱい秋の髪

有野 水都 東京都

髪を留めるとき、隙間があつてはヘアクリップが滑り落ちてしまう。だから、状態としては正常なのだけれど、視点を変えるだけであふれ出る面白さがある。秋の髪は、他の季節より豊かな艶を蓄えている。そうだ。

雨の降る夜のカフェラテ

水死体

橋詰 桜京 東京都

どうしても思考が働かない夜。悲しみが体の周りに一枚膜を作るような、そんな夜の体の中にたまった湿気は死の気配を含んでいる。けれど、悲しみに呆然と溺れながら飲むカフェラテのなんと美味しいことだろう。悲しみは溺れるために、カフェラテの美味しさを知るためにあると信じた夜があるのだ。

てのひらに金平糖を出し過ぎて

昼の銀河に出合う弟

常田 瑛子 山口県

偶発的な出会で知った世界。金平糖を瓶から出したときの涼やかでこまかい音の粒が手のひらに広がる。主体を信頼して両手を皿のようにして待つ弟の目の前に、すべて人が作り上げた甘い銀河が広がる。

内側のほうからちゃんと

無花果になるために

灯すテーブル・ランプ

折原 神奈川県

ちゃんと無花果になる、という意識はどこから始まり、どこへ向かうのか。腫瘍のように増殖し、内側から徐々に変わってゆく。見えず、止めることもできない。変化の先は明るいばかりではない。闇の中で灯すテーブル・ランプの光で見えるものは果たして何だろうか。

ぐりを節約してるぐら

牛田 悠貴 東京都

ぐりとぐらは、二人で一つ。均等であり、対等であり、互いが互いの存在に影響しあう。なのにどういうわけか、ぐらがぐりをないがしろにしている。関係性とは、何のきっかけもなくじわじわと変化していく。気が付いた時には、もう戻らない。

灯籠を流して過去がのびてゆく

齊藤 栞 埼玉県

のびてゆくのは、水面に映った光。けれど主体が見ているのはその光を燈すまでの時間。遠ざかるほど時間が、あの日々が水面に触れ薄まってゆく。ずっと閉じ込めておきたかった、触れることさえしなかったのに、もうあんなに遠くへ流されてしまった。

前身頃うしろ身頃の間秋思

絵巻 東京都

前身頃とうしろ見頃の間にあるのは、体。私たちの体は生きるとき何かを満たし、何かに包まれている。体に詰まっていたのは「秋思」、いや体そのものが秋思なのかもしれない。私たちは常に思い、考え、憂いている。読み手の想像力によって温度のある体が浮かび上がってきた。

年輪を歪ませるほど好きだった

もくめ 北海道

人を愛してしまったり、行きつくところまで行きつくしかない。たとえその日々が終わった先に大きな歪みが生まれてしまっていたとしても。手離さなければ歪みなんて気が付かずにいられたのかもしれないが、離れてしまった。それでも好きだったのだ。

鉄琴に似ていて転がりたくなるよ

真冬の男の子のひろい胸

汐見りら 東京都

「男の子」の、一日一日すぎる度に戻れない変化が伴う、あの時代のみ持っている薄くて広い美しい胸。たしかに、軽く叩いてみると鉄琴のような硬質で冷たい音がしそうである。その音が聞けるのは、きつとたたった一人。鉄琴の上を転がるという、無謀で冷たく、甘やかな夢を見ている。